

言葉の

レスト

ラン。

食前酒 1

おかんがね

毎晩作ってくれる手料理をね

毎日毎日うまいうまいとたいらげるがごとく

世界がね

毎日用意してくれるよしなしごとをね

毎日毎日うまいうまいとたいらげていたんです。

一日の終わりには

「ごちそうさまでした、今日もおいしかったよ ありがとう世界。」

って新婚の夫婦みたいに甘くて安いセリフを心の中で

つぶやいてははにかみ眠りについたりしてね

毎日を世界と新婚気分で楽しく過ごしていたんです。

しかしです。

そんな日々を繰り返していますと

やっぱり人間欲が出てくるというか

もらったものは返したくなるというか

一食一飯の恩義という奴ですか。

オレが作った手料理も世界に食べてもらいたいやんけ！

って想いがムクムクと湧き上がってきました。

食前酒 2

そう思った方がいいものの
いざ実現しようと思うと
幾つか難題がでてきまして

ぼく考えました。

まず 1 つ目の問題。

包丁が使えないオレがどうやって料理を作ろうか？

答えはカンタン。

相手は世界なんやし、なにもホンマに料理を作らんでも
言葉を使って料理を作ればええやんか。

相手は世界やねんから

音でも絵でも言葉でも

なんでも食ってくれるでしょ。

1 つ目の問題解決。

つづいて

2 つ目の問題。

さて、相手は茫洋たる世界やねんから
どうやって食べてもらおうか？

この問題は難しく感じたけれど

少し考えれば1つ目の問題より答えはもっとカンタン。

あなたに食べてもらえばええやんか。

あなたは世界の一部でしょ？

つまり

世界の全てだ。

だから

あなたに食べてもらえりゃ、世界が食べたことになる。

あなたは世界そのものだから。

これで2つ目の問題も即解決。

さあ、残るは最後の問題。

どんな料理を作ろうか？

これは正直悩みました。

悩みに悩んでムキ栗食べました。

なんせ初めて世界に食べさす料理です。

女の子が、初恋の男の子に

バレンタインチョコを渡す時のような緊張感。

お金をかけて見栄えのする豪華なモノを作ろうか。

むしろいっそのこと渡さないで、自分でたいらげてしまおうか。

あれこれ悩みました。

食前酒 3

しかし

だいたいの悩み同様

考え続けていると

その時とりあえずの答えは出てきました。

“飾らずに 今のありったけの想いを 丸々注ぎ込もう！”

答えなんて、出せばいつもありふれています。

技術？クソ喰らえ。

経験？クソ喰らえ。

才能？クソ喰らえ。

その時その時の自分にしか作れない最高の料理ってやつがあるじゃないですか。

そんなのを作ってやろう。

そう決めました。

僕らにできることなんて

技術や才能があろうがなかろうが

そんなことはおかまいなしに

今の自分のベストを尽くすことだけですもんね。

うさんくさい料理人がTVの中で叫んでました。

「料理はあいじょー！！」

嘘くさいことの中にこそリアルは隠されてたりするもんだ。

料理は愛情。

子育ては愛情。

SEXも愛情。

文通も愛情。

要はなんでも愛情。

じゃあ愛情ってなんだ？

そんなコクのある問いかけは、後にとっとくとして
とりあえず自分なりの愛情を言葉に練りこんで
言葉と言葉の間にぎっしり詰め込んで
初めての言霊創作料理を
世界とあなたと自分のために作ってみました。

もし良ければ

言霊フルコース 魂の丸焼き

どうぞ

召し上がれ。

青野菜のサラダ文 1

まずはね

やはりサラダ的な役割を担った
心をほぐす青野菜のような文章を書いてみたいと思います。

というか青臭い文章です。

ケツの青いガキのざれごとです。
なので
青臭いことを聞きます。

私は生きた！
私が生きた！！
って胸を張って言えるような人生を歩みたいと思いませんか？

僕らはいつも、意識してようがしてまいが
言葉で、行動で、服装で、つまるところそのすべてで
“私はこういう人間だ！”
って周りにアピールしてるじゃないですか。
自己中の人は堂々と。
裏自己中の人は、さりげなく。

コンパや飲み会に行った時の

それぞれの熾烈なアピール合戦を想像してもらえれば

イメージしやすいんじゃないかと思います。
前に出るもの

後ろに引くもの

上に浮くもの

ただただ喰うブーヤン。
アピールの形は様々です。

つまりは
こういうことじゃないかと思うんです。

青野菜のサラダ文 2

人生とは名刺である。

いつの日か、この世に別れを告げ
あの世の入り口で髭面エンマ大王に出会った時に

「いやー、どうもどうも。私は地球でこういう生き方をしてきたもんです。」

って渡すための名刺のようなもんであると。

その名刺が自分らしくなかったら、悲しくないですか？

派手でも地味でも、長くても短くても
なんでもいいと思うんですよ。

ただ

これは見事に良くも悪くも自分丸出しの人生やな。って思えないと

せっかく悩んで学んで必死こいて生きてきた甲斐がないと思うんです。

噂で聞いたんですけどね

エンマ大王は自分の元に来た人間が
満足気な顔をしてなかったら1つだけこう訊ねるそうです。

別に罪など一切問わず

地位とか名誉とか善行とかまったく聞かず

1つだけこう訊ねるそうです。

「おまえさん、どうしておまえさんは自分自身にならなかったの？」

この噂、ホンマちゃうかなと思うんです。

僕らが命の鼓動の中ですべきことといたら

誰かに勝つとか負けるとか、成功するとかしないとか

そんなチンケなもんは楽しいオマケみたいなもんで

一番しなあかんことは

これが私だ！

これこそが私の生きた人生だ！！

って、もろ手をあげて言えるような人生を

創りあげることやと思うんです。

どうせ僕らなんて月から地球を見たら

肉眼で確認できないくらい

ちっぽけな命なんやから

遠慮なんかせずに

これでもかってくらいに自分放題に生きてやろうじゃありませんか。

それぞれが

それぞれの道を

ゴキゲンに生きて

終わりの時がきたら

エンマと乾杯。

スープ1

サラダな文章を書いたんで

次は後味爽やかな野菜スープな文章をご賞味いただきたいと思います。

僕には夢がない。

I have a no dream.

夢。

ないなあ。

っていうかいらんなあ。

昔はね、ボクも夢あったんです。

でも、小さな夢のいくつかをチョコチョコと叶えていくうちにね
おぼろげながらも気がついてきたんです。

ハハ〜ン

さてはオレ、夢を叶えたいんじゃなくて
ただ無我夢中になりたいだけやねんな。

平たく言うなら

夢を追いかけていたいんじゃなくて、夢の中にいたいんやな。
自分のことなんか忘れてしまうくらいに。

なんてことに気づいてきてたんです。

そんなおぼろげな時期に

衝撃の事件は起きたんです。

登場人物はネーチャンの子ども、ハルナとカイト。

4才と2才。

女と男。

おてんばといがぐりぼうず。

そのオイとメイが我が家に来て、キャッキョウというて遊んでたんです。

机の上によじ登ってはジャンプして飛び降りて
何回も何回もそれを繰り返しては、その度にキャッキョウというて喜んでるんです。
ホンマに心底楽しそうなんです。

“心底”ってこういう時に使うためにあるんやろうなあ。
って思わせるくらい楽しそうに笑ってる。
心底楽しそうな奴って
見てたらこっちまで楽しくなってくるじゃないですか。
だから
ボクもなんか笑けてきて

「ヤイツ、ハルナとカイト！
おまえらなにがそんなに楽しいねん！？」

とか思いながらケタケタ笑ってたんです。

そしたらね
その時ですよ。
全身に雷走って
あるコトに気がついたんです。

“アレッ！？こいつら夢ないやん！！

夢はおろか、目標も目的もないやん。

それやのに、こんなにもアホみたいに楽しそうやん！！

これやん。

これやん！

オレが求めてたんはこの感じやん！！

なんの意味もなく輝きまくる。

カッコ良すぎるやんかコイツら！！”

はた目には

ピョンピョン跳ねてゲラゲラ笑うガキ2人と

それを見てだらしなく笑う大人1人の

よくある光景だったんですけど

ボクの心の中では感動タイフーン・カトリーナが吹き荒れていました。

真実はいつも道端に転がっているんすね。

とにかく

それからです。

明確に夢がなくなったのは。

夢？ないなあ。

目標？ないなあ。

目的？ないなあ。

っていうかいらんなあ。

そんなもんはなくても人生はしこたま楽しい。

夢からさえも自由になって

両の足でしっかりと地面を踏みしめ

意味ナシダンスを踊ってやろうと心にきめました。

夢なんてなくてもキラめきまくってやろうと
心にありおりはべりいまそかり。

辛気臭い顔した偉そうなおっさんたちよりも
天衣無縫のガキンチョたちの方が
盗めるもの
てんこもりです。

どこかの国の言葉でこんな言葉がありました。

「みんな勘違いをしているが、大人になるということは
まっさらな子どもに戻るためのステップなんだよ。」

イイコト言うぜ異国の人よ。
なってやろうじゃねえか。

もぎたて野菜のような新鮮な心を持った大人ってやつに。

夢トマト煮 1

夢の話が出たので
ついでにもうひとつ夢の話。

よくミュージシャンとかスポーツ選手とかが言うじゃないですか。

「あきらめなければ夢は必ず叶う！」

アレ、ホンマか！？
あきらめなければ叶う夢もあれば
叶わない夢もあって
その大半は別に叶わなくてもいい夢なんちゃうんか！？

人は夢を叶えるためじゃなく
いきにいきるために生きてんだから。
どうもシックリこんね。
なんてことをブツブツ考えながら
四角いテレビジョンを見てたんです。

そしたらね
そこにバッチリ映ってました
どうにもこうにもシックリくる意見が。

物語の主人公の名はボクサーサカモト。
1970年12月。
福岡県川崎町に生まれた不撓不屈の男。
彼の人生をダイジェストで振り返るとこんな感じになります。

- ・ 幼い頃に両親が離婚。
- ・ 弟とともに親戚宅に預けられ少年時代を過ごす。
- ・ 小学2年生の8カ月間を児童養護施設「和白青松園」で生活する。
- ・ 10歳になると上京。

- ・ 高校卒業を期にボクシングを始める。
- ・ プロデビューを果たすと
持ち前のハングリー精神とハードパンチでKOの山を築き
『平成のKOキング』と呼ばれるほどのボクサーに成長する。
- ・ 日本チャンピオン、東洋太平洋チャンピオンを次々と倒し
順調に世界チャンピオンへの階段を登っていく。
- ・ しかし、世界の頂はやはり高く
4度世界チャンピオンに挑戦するも力あと一歩及ばず
ことごとく敗れる。
- ・ その後も
夢をあきらめずボクシングを続けるが
長いボクサー生活によるダメージの蓄積からか
腰を痛めてしまい
自分の体が自分の体でないような感覚に陥り
プロボクサーとしての限界を感じ
引退を決意する。

そしてここからが
テレビで流れていて僕の心を鷲掴みにしたシーン。

夢トマト煮2

2007年1月6日

現役生活最後の試合を引き分けで終え
控え室に戻ってきた彼をカメラが捉えます。
そして記者は顔を腫らした彼に質問をします。

「あなたは今日でボクサーを引退しますが

子どもたちに、なにかメッセージはありますか？」

僕の目はテレビに釘付けです。

努力して

努力して

努力して

最後まであきらめず頑張ったけれど

“世界チャンピオンになる”

という夢を叶えられなかったこの人は

“あきらめなければ夢は必ず叶う”

という定番のセリフを言えないこの人は
なんて答えるんだらう。

長い長い一瞬の沈黙の後に
彼は、静かに力強く答えました。

「夢をあきらめずにがんばり続けたら

その先には必ず笑顔が待ってるから。

だから、夢をあきらめずがんばってほしい。」

そう言うと

ボクサーサカモトはとても素敵な

子どものような笑顔で笑いました。

シックリ。

この上なくシックリきました。

自分の全存在を賭けて

1つのことに打ちこんで

努力して
挑戦して
精一杯がむしゃらにやっても
夢が叶わないこともあるかもしれない。
もしかしたら叶わないことの方が多いかもしれない。

でも
その先には必ず笑顔が待ってるから。
だからがんばれ。

それは納得できる。
それなら納得できる。
あんな晴れ晴れとしたイイ笑顔をされたら
納得せずにはおれない。

ベストを尽くしきった人間に後悔はないんやね。

そんな清しいことを教えてくれた彼の名は
坂本博之。

ボクは
ボクの心のチャンピオンベルトマートを
彼の腰に
そっと巻きました。

食事をしていると喉も渴いてくるので
たまにはドリンクな話を。

「どんな出来事も、それ自体は無味無臭で
あなたがそこに自由に意味を注ぎ込むだけだ。」

というような言葉をよく聞きます。

この言葉を初めて聞いた時、だからどうなんだコノヤロウ！
って感じで
ビタッと心にハマッてきませんでした。

ところが
ある時
その意味がおそろしくビタッと心にはまりました。
もうブーメランパンツくらいビッタビタ。
食い込み気味。

その心ビタ現象は
岩淵大起という少年が書いた

『まだ17才だけど、人生って面白いと思う』

という本を読んでいる時に起こりました。

その本によると
岩淵少年
生まれた時から足の具合がよくなく
幼い頃からずっと松葉杖のいる生活だったそうです。
そんな岩淵少年、5歳になる少し前に

“幼稚園に行きたい！！”

という想いがフツフツと湧き上がり
両親にその気持ちをストレートにぶつけて
すったもんだのひともんちゃくがあった末に
生まれて初めて幼稚園に行くことになったそうです。

そして

幼稚園通学初日。
期待と不安を胸いっぱい抱えて
幼稚園の門をくぐった彼の目に映ったものは
自分と同じ年くらいの子どもたちが松葉杖を使わず
ところ狭しと部屋中を元気に駆け回る姿。。。

それを見た彼はこう言ったそうです。

「よかった！みんな歩いて、ほんとによかった！歩けないのが僕だけでよかった！」

マジで。

彼、マジでそう思ったそうです。

アンタ菩薩？

徳、高すぎです。

いや

僕もはじめて読んだ時は

またまた自分そんなん言うて隣におるお母ちゃんから

アメちゃんもらおうと思ってんねやろ！

せやろ、岩淵少年！？

おっちゃん怒らんから正直に言うてみ！

と思ったんですけどね

本を読み終わった時の印象から察するに

どうも彼はホンマにそんなん思っちゃえるタイプの

ヒューマンなんです。

いやー

正直ド肝抜かれました。

目から鱗とサザエとアワビが落ちました。

人間ってこんなにも自由なん！？

こんなにも出来事の受けとめ方に振り幅あるんや！？

僕の公式ではね

生まれた時からずっと松葉杖生活。

↓

生まれて初めて幼稚園に行く。

↓

自分以外の子どもはみんな元気に走り回ってる。

↓

ドーンと落ち込む。

となる手はずだったんです。

この流れ

この公式は

ピタゴラスの定理ばりに鉄板だろうと。

ここは100人中108人が落ち込むところだろうと。

そう確信してたんです。

ところがね、岩淵少年は

「I'm happy」

と、のたまったわけです。

予想と真逆。180度の転換。

コペルニクスの転回ばりの衝撃です。

彼は“自分だけ走れない”という
喜びを感じるにはウルトラC難度な状況をあっさりと

「よかった！」

と言っただけでした。

エエ奴すぎて

笑いの観点から観れば0点です。

非常に気持ちの良い裏切りでした。
それがアリなら
なんだってアリやんか。
どんな出来事だって
自分次第で喜びに繋がれんことないやんか。

世界が広がりました。

本当に世界は無味無臭で
自分が勝手に味付けしているだけなんやかと
心から実感しました。

そんな気持ちで世界を眺めてみると
僕らはおそろしく不自由で
おそろしく自由です。

起こった出来事は変えられないけれど
受けとめ方はいくらでも変えられる。

過去
現在
未来
自分自身について

すべて
何度でも
無料で再定義し放題。

まるで漫画喫茶のドリンクバーみたい。

中身入れ替え放題飲み放題。

世界はまさしくドリンクバーの魔法のコップです。

どんな解釈を注いでもいいし

何杯おかわりしてもいい。

今日も明日も明後日も
魔法のコップに
特製ジュースを流し込み

腰に手をあて
喉を広げて

勇猛果敢に
一気飲み。

お笑い香辛料 1

続いては、笑いという名の調味料について。

さきほどの岩淵少年
きゃなりのイイ奴ですが
もちろん彼も人の子
その後

運動会でかけっこをする時には

「自分だけが杖で走るなんて悲しかった。恥ずかしかった。」

とドンヨリ落ち込んでいます。

それでこそ人間。

落ち込む時にはきちんと落ち込まねば。

しかし

落ち込んだとてまっすぐソウルな彼は一回り大きくなって帰ってきます。

彼はその後

こんなことも述べています。

「人生つらいことがなくてはおもしろくない。

苦しいことがあって初めて楽しいことへの期待がもてるのだ。」

敬礼したくなるくらいに立派です。

文部省推薦図書みたいなのに選ばれそうなことこの上ない。

ここで少し話が飛びます。

麻雀の世界に

現役時代20年間無敗を誇り

“雀鬼”と呼ばれ、最強の名を欲しいままにした伝説の男がいます。
その彼が

「理想の麻雀とは？」

と聞かれ

こんなことを答えています。

「みんなの点数が始まった時と同じ状態で終わるのが理想の麻雀。」

麻雀を知らない人のために少し説明をしますと

麻雀というのは

みな同じ点数を持ってスタートして、その点数を奪いあい
勝者を決めるゲームなんです。

そんな奪い合いのゲームで20年間勝ち続けた男は言います。

みんながそれぞれ勝ったり負けたりを
繰り返しながらゲームを続けて

終わった時には

みんな始まりの時と同じ点数に戻っていて
勝ってる奴も負けてる奴もいない。

それが理想の麻雀だと

彼は言いきります。

お笑い香辛料 2

話はさらに変わって
ボクが初めて保育所に行った時の話。

ボクはガキンチョのころ

極度の人見知りで
めまいがするほど保育所なんかに行きたくなかったんですが
両親共働きだったため、3才の時に母親に強制連行されました。

初めて行った保育所は怯える3才児にとっては

まるで網走刑務所のようなものでした。

大胆に臆病者だったボクは
保母さんの一瞬の間隙を突いて脱走し
柵を乗り越え泣きながら家に向かって爆走しました。

家に着いたら汗と涙と鼻水まみれでベロンベロン。
完全なるイモ野郎。
チキンレースストップ独走です。

岩淵少年の幼稚園デビューと比べられたらコールド負けです。

しかし
このままでは我ながらボクがあんまりにも可哀想です。
そこでね
岩淵少年と僕の行動に

“笑いの観点”

という秘密兵器を投入します。
人がその話を聞いた時に
こいつアホやと笑ってくれる可能性で勝負すれば
僕の目利きでは
幼稚園で走り回るみんなを見てニッコリ微笑んだ奴より
保育所にチビるくらいびびって脱走して
鼻水まみれで家に逃げ帰った奴の方が
13馬身差でおもしろい。

その時

“笑いの物差し”

によって世界の価値は逆転する。

そして

僕の世界は救われる。

さらに

ここが

“笑い”のすごいところで

笑いによって岩淵少年の世界さえも救われうると思うんです。

笑いによって2人の世界は平らになるから。

お笑い香辛料3

真っ当な感覚を持った人間なら
崇められても見下されても居心地が悪い。

もっとフラットでええやん。
って感覚がはたらく。

そして

歪んだ世界をほぐすための一番手っ取り早い方法が

“笑い”

人の輪の中に心からの笑い声がある時
その場はふんわり柔らかい。

笑いは世界の味を調える。

“雀鬼”桜井章一も20年間勝ち続ける孤独の中で
敗者を生み出し続ける悲しみの中で
そんなことを感じたんじゃないかとでしょうか。

フラットが一番いいよ、と。

岩淵少年も言います。
中学生の時にヤンキーの同級生から

「おめえ、歩けなくてつらいべえ」

と言われた時
このストレートさは新鮮で
僕はむしろ、やさしさを感じたと。

それは
きっとヤンキーの言葉が

同じ地平から放たれた言葉だったから。
同じ地平から放たれた言葉は
褒められてもけなされても気持ちがいいもんです。

我、思うんです。

勉強で勝って、スポーツで負けて
財産で勝って、バレンタインチョコの数で負けて
そんな勝ったり負けたり泣き笑いのレースを続け

最後は
みんな
始まりと同じ場所に戻り
なんだオレらは結局同じような
もんじゃねえかと笑い合いたいなど。
酔っ払いのオッサンが言ってました。

「自分を笑える人間は、大人だ。」

自分を笑って
世界を笑って

地球と陽気にフラダンス。

今回はいよいよメンディッシュ。
我が人生最大のテーマ『自由』について。

長い年月をかけてね
自分が最も求めているものはなんなのかと
まるで世界中の財宝を捜し求める
インディジョーンズのように
自分の内から外から
手当たり次第に探しまわっていたんです。

オレが本当に欲しいのは金が地位か名誉か成功か？
はたまた愛か平和か才能か？
それとも
一途に尽くせるかわいい彼女か、ヤリチン伝説か？
いやいや
もしかしたら霊長類最強の称号か？
意外とハンドパワーだったりして。
スプーン曲げてみようかな？
と真剣なのか
ふざけているのか
自分でもわからなくなってくるほど
支離滅裂な自問自答を繰り返し
考えてるだけでは埒が明かないので
自分を人間リトマス紙にして
色んな状況に身を置き
その時
自分の心はどんな反応を示すのかを研究していたんです。

そして汗と涙と惰眠をむさぼり重ねた結果。

オレにとって

大切なのはお金じゃない。
大切なのは時間じゃない。
大切なのは愛じゃない。

大切なのは自由だ。

自由じゃないお金なんて
自由じゃない時間なんて
自由じゃない愛なんて

いらねえ。

自由じゃなけりゃ、そんなの愛じゃねえ。

自由じゃなけりゃ、この命、なんの意味もない。

大切なのは自由だ。

この首に、首輪はいらねえ。

という結論に達っしまして

どうやら自由がオイラの命の基盤にあるようだ。
全ては自由であるところから始めよう。

という人生の柱を打ち立てたんです。

しかしね、君。

君はさっきからフリーダム、フリーダムと騒いでいるが
そもそも君にとっての自由とは一体なにかね？

という声が
自分の内なるご意見番から聞こえてきまして
自分を巡る大冒険－第2章－が始まりました。

1章では
自分の最も求めているものと 天空の花嫁と 楽そうなバイトを探し出し。

2章では
自分にとっての自由と 幻の大地と 一人暮らしの女の子を求めて。

僕は再びあてどない旅に出ました。

紀伊国屋に行き
スカパーに入り
コンパに出かけ
自分にとっての自由を探しました。

しかし
やはり自由を知る道は険しい。

紀伊国屋では
その時夢中になっていた麻雀の本に心奪われ
スカパーをつけると
エロいチャンネルばかりに心囚われ
コンパに行くと
かわいい女の子の胸元に心そそられ
まったくもって自由探しの旅は前に進まず
自由のかけらさえ見つからないまま
瞬く間に時は流れていきました。

しかし。
しかしですみなさん！

たとえ道草しながらでも
探し続けていれば求めていたモノは
唐突に見つかったりするもので
“自分にとっての自由”を探し始めて3年目の春。

僕はそれをドンピシャで表したエピソードにとうとう出会ったんです！
僕はこの話を知った時

「これこそが自由だ！」

と快哉の声をあげ

天高く拳を突き上げました。

そのどストライクのエピソードは
古本屋の100円棚の中にあった

『狼たちへの伝言』

という本の中で煌々と輝いていました。

ハードボイルドな作者が大学時代に
一番感動した体験だったというふれこみの実話です。

話の舞台はアメリカ。

人種の坩堝USAには
ナチ・パーティーという極右の政治結社があって
そこのボス、リンカーン・ロックウェルという男は
年がら年中仲間に向かって

「黒人を殺せ、ユダヤ人はすべてガス室に送り込め。
ついでに東洋人はみんなアジアに送り返しちまえ！」

と哀れなくらいに極悪非道な意見を
鼻息荒く主張していたそうです。

で、ある日
ロックウェルは仲間内だけでは飽き足らず
リンカーン時計台の前まで行き、道行く人々に向かって

「自分たちの信条は、ユダヤ人を殺し
黒人を全部鎖につないでアフリカへ送り返すことだ」

と声高に叫んだそうです。

そしたらね
やっぱりね
さすがに警察に捕まったそうです。

主張するのは自由だけど
民衆の前で演説すると
アメリカでは陰謀罪というのが成立して捕まるんだそうです。

そして
皮肉なことに捕まったその男の弁護士に選ばれたのが
若くて優秀なユダヤ人のナイスガイだったそうです。

その若くて有能な彼は
アメリカの憲法を見事なまでに駆使して
ロックウェルを弁護し
裁判で彼を無罪にしたそうです。

そして判決の後の記者会見で、ロックウェルが

「オレはオマエのおかげで勝ったが
それでもオマエらが、ガス室に送られるのを期待している」

と吐き捨て、見事なまでの悪役ぶりを発揮すると
それを受けた若いユダヤ人の弁護士は
眉ひとつ動かさずに
こう答えたそうです。

「私は自分のすべてをかけてもあなたのいうその意見には反対する。
ただし、同時に私は弁護士としてあなたがそれを言う権利は命をかけて守る。」

どうです！？

シビれませんか？

これが自由っしょ！！

私は自分のすべてをかけてあなたにぶつかる。

ただし、同時に

あなたが自由に私にぶつかってくることを

命をかけて認める。

自分の自由を求め

同時に相手の自由を認めるこの勇ましさ。

これこそ本当の自由っしょ！！

そもそも

僕らの住むこの世界はみんなの自由のせめぎ合い。

それぞれの信念とか信条とか個性とか

色んな形の自由がぶつかって

いがみ合い

許し合い

笑い合い

揺れ動きながら

様々なドラマを織り成すパラレルワールド最前線。

僕らも

自分の自由をこねてのばして丸めて広げて

この摩訶不思議な世界に

グウワンギュワン叩きつけよう。

そう！

それはまるで麺作りの達人たちのように。

Y e s !

Y e s Yes ! !

We are 讃岐うどん ! !

愛寿司 1

お口直しのデザートをのぞけばこれがラスト。
ラストはやはり
幻の高級食材
『愛』で
握り寿司を作ってやろうと思います。

やろうと思います。
と書いたままではいいものの
幻の食材だけあって、なかなかこれぞ愛だっ！！
なんてものに出会えるはずもなく
とりあえず自分の普段の生活の中に
ちりばめられた愛を探してみることにしました。

さあ愛を見つけてやるぞと

押入れから虫メガネを引っ張り出して
日々の暮らしの隅から隅まで目玉広げて観察した結果。

彼女といる時 愛ふんわり。
家族といる時 愛たんまり。
友達といる時 愛にんまり。
エロビデオ見ている時はエロもっこり。

ってな具合に
日常愛プラス1フェイスバレットが出揃いました。

幻の食材というわりにはけっこうあるもんだ。
シメシメ
なんて思いながら
それをさばいて開いてこねくりまわしてみることも数時間。

突然ひらめきました。

アレレ、エレレレレレレ

愛を感じている時

その時まるで双子の兄弟のように
いつもいつも

一緒に感じている感情があるんじゃないかい？
もしや、愛とこいつは2つで1つのワンセット。
握り寿司でいうならシャリとネタのような
ニコイチ不可分関係なんでないかい！？

では

その

いつも「愛」というシャリのうえに
のっかっている感情とはなんじゃらほい！？

もったいぶらずに言います。

それは「喜び」。

大切な人と一緒にいる時

いつも

愛と一緒に喜びを感じまくっている。

愛と喜びはいつも

ニコイチダブルパンチ。

二つで一つ。

どころか元々一つじゃねえの？

どうなんだい！

ジョンとヨーコ

太郎と敏子

林家ペー・パー子！？

そうなんだろ？

もちろん返事はなくて
部屋で一人カラカラ空回り。。。

しかし

こりゃまたえらいことに気づいちゃったな。
つまりはあれかい？
人生を愛したかったら
人生を喜ばばいいってわけかい！？

なんだいなんだい
そんな素敵なことってないじゃない。

自分や周りの人が嬉しくなることを探して見つけて実行してれば
いつの間にか人生が愛ってことだろう！？

そんなの一石二鳥すぎるじゃない。
ひとつの石で孔雀と白鳥ゲットじゃない。

たまらんね。
オイラ苦しいことは嫌いだけれど
嬉しいことは大好きよ。

そうと決まれば
どんどん自分と周りの人を喜ばしちゃうよ。
そんなことばっか考えて思いついたら即行動。
愛と喜び即直結。
そんな生き方はこの上なく春爛漫。

なんて思っていたら
『随喜功德』って言葉まで見つけちゃって
喜ぶことで徳まで積みちゃうそうなの。

なんだよ、なんだよ
喜ぶだけで徳まで積みちゃうの！？
もう無敵じゃない！
ひとつの意志で梅松桜じゃない。

こうなりゃオレ、本格的に喜んじゃうよ。

喜びで飯3杯いっちゃうよ。

喜びのプロフェッショナル

うんにゃ、喜び名人になっちゃうよ！！

って、テンションババ上がっていたら

自分の中の頭の固い若年寄が

「しかしね、おまえさん。

もしもおまえさんのその愛イコール喜びという仮定が間違っていたらどうするんだね？
失敗のないようもっと検証に検証を重ね、慎重に行動したほうがいいんじゃないか？」

ってなことを言ってきます。

しかしね

僕の中の血気盛んな野武士が言い返します。

知るかそんなもんツ！

どうせ僕らはいつだってどこか間違ってたんだ。

歴史と科学だって今もきっとどこか間違い続けていて
日進月歩で世界は脱皮し続けてんだ。

だから、自信を持って堂々と間違えちゃうよ。

寸分たがわず世界を見据えることなんてできっこねーんだから
って、はなからそんなもんはねーんだから。

頭の中の宇宙プールを泳いでは
頭をぶつけてケガして間違い気づくたびに
心地良くやり直しちゃうよ。

失敗せずに成功したら、それが一番の失敗。

なんて言葉があるくらいなんだから
7 転び 8 起き 9 ファイティングポーズとっちやる
くらいの意気込みで生きに生きちゃうよ。

頭をぶつけてぶつけて自分の中のプールサイドをブチ壊して
プールを果てなき海にしてやりてえんだ。

というわけで

僕は

愛イコール喜びだと決めつけ

人生を喜ぶことで
人生を愛することに決めました。

人生を阿波踊り
人生を金魚すくうことに決めました。

愛と喜びの握り寿司

ヘイオマチッ！！

太陽が
地球の周りを
回っていたんじゃないくて
地球が
太陽の周りを
回っていたように
ほんとは僕らは
ひとりぼっちなんかじゃなくて
ボブ・マーリーが歌った
歌のタイトルのように
みんなまとめて
たっただひとつの
愛だっただんな
いいのにな